

【演 題】

「デジタルデンチャー・FD（ミリング）・PD」

キユウ・デンタル・スタジオ 亀遊 宏直
(富山県歯科技工士会)

【抄 録】

昨今、デジタル技術とデバイスの普及により、クラウンやブリッジなどの製作においてデジタルを活用した技工が一般的になって来ている。一方、義歯製作におけるデジタル化はまだ進んでおらず、その理由として高額な機器の導入コスト、材料コスト、CAD/CAMデンチャーの保険適応外などが挙げられるが、デジタルデンチャーの品質も年々向上しており、この分野における有意性が高まっている。

デジタルデンチャーの利点として、一度製作したデータを再利用し、同一の製作物を即座に製作できる点がある。特に、義歯の紛失や修理時に3Dプリンターを使用して仮義歯を製作できるメリットは大きい。また、デジタル技術ならではの利点として、排列平面を正確に可視化でき、WAXの収縮が無いという特長もある。この様な点から、デジタルデンチャーシステムを使用することで、経験の浅い歯科技工士でもシステムティックにデンチャーの製作が行え、教育面からも育成をスムーズに行えると考える。

今回、機能的な印象が得られた印象体をラボスキャナーでスキャンし、CADソフト(exocad)上でフルデンチャーのデザインを行い、ミリングを使用し製作し、義歯装着までのプロセスをお話する。また、パーシャルデンチャーのデジタル化、デジタルパーシャルデンチャーが登場し数年経つ。しかし、パーシャルデンチャーのデジタル化はまだラボサイドで行われていないのが現状ではないだろうか。理由としてデンチャーワークのデジタル化はさほど必要に迫られていない・機材導入コストが高額である。しかしメリットもある、デジタル設計は調整が容易で正確、経験の少ないスタッフも容易に作成できる、また昨今の歯科技工士不足への対応も考える。そこでパーシャルデンチャーのデジタル化にともない、デジタルとアナログを併用し製作する。はじめに模型調整、ブロックアウト、デジタルによる着脱方向・ブロックアウト、フレームワークの順に行い完成までをお話する。またミリング製作、プリント製作の違いによる製作過程もお話する。